

僧侶の部屋は、本堂から境内を斜めに横切った場所に建てられた日当たりの良い二階にあり、窓からは参拝者の行きかう境内を眺め下ろすことができた。

壁の一面に床から天井までの大きな神棚が設えられた部屋の片隅には、小さなテーブルとソファがあり、私が勧められてソファに腰掛けると、僧侶が沢山のアルバムと写真の束を取り出してきて一枚一枚説明しながら見せてくれた。写真の中には、この部屋で写された様々な国籍の老若男女が僧侶と並んで笑顔を見せているスナップが何枚もあり、これまでに大勢の人達が僧侶に招かれてこの部屋を訪れているらしい。

きっとこのお坊さんは人とふれ合い話す事が好きなのだろう。突然部屋に遊びに来ないかなどと誘われ少し戸惑いを感じていたが、それまでかすかに抱いていたこの僧侶への警戒心が緩んでいった。部屋を訪れた来客者達のスナップの他にも、お寺の行事や僧侶が旅行で訪れた旅先での写真が沢山あり、そんな写真を一枚ずつ解説をしてくれる僧侶の楽しげな様子に、お坊さんの生活も結構楽しい事もあるものなんだな～、と意外な事実を知った気分だ。

幼い頃より仏門に入りずっと寺で暮らしてきたという僧侶の話に、私は稻城からの帰りに立ち寄った寺で出会った、少年僧の事がしきりに思い出されていた。まだ13歳だという少年が家族と別れ、世俗と切り離された山寺で一生生きていくのだと聞いた時には、いくら仏の道に仕えるのだとはいえ、こんな少年が生涯閉ざされた世界に缶詰になったような暮らしを余儀なくされるのかと胸が痛む思いをしたが、この僧侶の話聞き写真を見れば、お寺で僧として暮らして行く事は、それほど閉ざされた世界に暮らす訳ではないのかもしれない。

写真の中には中国国内のみならず、海外で写されていた写真もあった。この辺りの村に農民の子として生まれた人間で、一生の間に海外旅行が出来るものが何人いるのだろう。それを思うと、学問を学んで立派な僧となれば人々の尊敬も得られ、このように広い世界への見識も深めるチャンスも得られる事は、逆に恵まれているのかもしれない。

あの日、くったくのない笑顔を浮かべていた少年僧のおかれた境遇に、暗澹とした思いが感じられていた

私だったが、そんな彼の未来に光が差したような気がして、少し気持ちが明るくなった。

しばらく写真を見せてもらいながら談笑していたが、そろそろお寺で行われるらしい謎の行事が始まる時間となっていた。それを僧侶に告げると、

「ああ！そうそう。面白いから見に行っておいで。それが終わったらまたここに遊びにくるといいよ」

と送り出してくれた。

え？また？

僧侶も話し相手が居なくて暇なんだろうか？

首を傾げながら再び境内を横切って本堂に向うと、先ほどまではガランとしていた堂内には20代から30代とみられるような歳若い僧が大勢集結していた。若い僧侶達は本堂の中心で向かい合わせに列になって座り、周りは1階も2階も見物客でいっぱいだ。

私は本堂の上をぐりと囲む回廊となった2階に登り、テラスの上から1階の僧侶達がこれから何を始めるのか、ワクワクしながら覗き込んだ。

程なくして、二人ずつ組になった僧侶のひとりが何事か声を上げると、対峙する僧侶が何かを叫び返しながら、両手を前につきだし手のひらを打ち合わせる様子が見られた。向かい合って叫びあう僧侶の中には、何か面白い言葉を言っているものも居るようで、見物客からは時折笑い声がこぼれるが、言葉の理解できない私には、何がなんだかさっぱり解らない。

いったいこの青年僧達は何をやってるんだろう？

結局この時には、この行事に何の意味があるのか、僧侶達が何を言い合っていたのか、私には全く解らないままに終わってしまったが、日本に戻ってから調べたところ、それはチベット仏教特有の禪問答であるのだそう。

チベット仏教では、論理的な哲学的思考が重要視されており、日頃から学問を積み思想を深めた僧侶達は、日常的に自身の哲学を持って対峙する僧との問答修行を重ね、自身の仏教哲学を磨くことに切磋琢磨しているのだという。この問答で論理的に矛盾した答えをしたり、言葉に詰まってしまえば負けとなるのだそうで、例えば、まず始めに「仏とは人であろうか」と問うと、

答え手は「そうである」とか「そうでない」とか答える。もしそうだとすれば一歩を進めて、「では仏は生死を免れまい」「仏は生死を免れた」「いや、仏は生死を免れぬ。何故なら仏は人である。人が生死を免れぬように、仏も生死を免れまい」

このようにたたみかけて問い詰める。

そこで答え手がやり手であると、「仏は人でありながら生死を免れた。仏の生死は仮に生死を示現したものである」などと言って、仏に法身、報身、化身の三種があることを解するようになり、また、もし人でないと答えると、「いや、インドのシャカムニ仏は確かに人であった。これはどういうことか」と言うように、どこまでもなじってゆく。どっちに答えても詰まるようにどんどん問答を進めるので、その問い方と答え方に僧の知力が問われる為、この禅問答は僧の出世試験の為にも用いられているのだそうだ。

手を打ち鳴らして叫びあう僧達の姿が、そんな意味の込められた問答であったとは露知らず、2時間も前から寺に待機して楽しみにしていた催しが全く訳が判らないものであった事に、私はやや不満だった。

言葉が解る人間にとっては、丁々発止と活発に取り交わされる僧侶のやり取りは、興味深く面白いものであったであろうし、言葉が解らずとも、せめて何が行われているのか、その意味だけでも解っていれば、若い僧侶の知力をかけた精力的な言葉のやり取りを楽しんで見物できたのかもしれないが、その場の私の感想は、ただ「???・・・」であった。

なんだか肩透かしをくらった様な気分のまま、楽しみにしていたその日のイベントも終了してしまったが、まだ日は高く、さてこれからどうしようかな・・・と本堂の外に出た私はちょっぴり迷っていた。先ほどの僧侶からは、禅問答が終わったらまた部屋に来るように



チベットの寺院で行われる、修行僧たちの禅問答の様子

と誘われてはいたが、曲りなりにも僧侶の部屋へ、女性が一人で遊びに行くなど変じゃないだろうか？

件の僧侶のあつけられかんとした態度には、後ろめたさなど全く感じられなかったが、誰かに見咎められて物議をかもしたりしないのだろうかなどと、こちらの方が心配してしまう。このチベット高原一帯でも、名高い寺の境内に自身の個室を持つ僧侶ならば、それなりの身分を持つ立場なのではと思われたが、行きずりの女性を部屋に招き入れるなど、そんな軽々しい振る舞いをするのが許されるのだろうか？

そんな事を思いながら所在無く寺の中庭に歩み出ると、部屋の窓から外を眺めていたらしい僧侶の方が私を見つけ、二階のまどから手を振りながら、部屋においでと声をかけられた。

先方から招かれれば特に断る理由も無く、私は再び僧侶の部屋を訪れた。ニコニコと笑顔を浮かべている僧侶の隣に、先ほどのソファーに腰掛けると、問答は面白かったか？と尋ねられ、私はあいまいに頷いた。

自分が若かった時もずいぶんあれをやったもんだと僧侶は笑顔で思い出話をすると、ふと思いついたようにお腹が空いてないか？と私に尋ねた。もうお昼をまわっている時刻だ。この日の朝も私の定番食堂と決まってしまった麺屋でいつもの汁そばを食べただけの私は、今度は素直に大きく頷くと、僧侶はツアンパを食べてみるか？と私に聞いた。

ツアンパとはチベット民族が常食としているという「麦焦がし」のような食べ物だ。知識としては知っていたものの、それを口にした事は無かった。この旅を通して、チベット文化に大きく興味を惹かれていた私が、「食べたい、食べたい!」と身を乗り出すと、僧侶は嬉しそうにバターのような物を取り出し茶碗の中にひとかけら入れると、取り出してきた袋の中からきな粉のようにしか見えないツアンパをサラサラと注ぎ入れ、そこに少し水を注ぎ入れると、こうやって作るんだよと私に作り方を示しながら指で捏ね、適当な硬さにまとめて小さなラグビーボールのようなお団子にした。

僧侶が作るのを見よう見まねで私も自分のツアンパを捏ねてみたが、これが意外とコツが必要で、粉を撒き散らすばかりで上手くまとめられない。見かねた僧侶が、自分の手で捏ねても構わないのなら作ってあげようか？と申し出てくれたので、ありがたくお願いした。

笑顔で私の為にツァンパを捏ねてくれている僧侶の隣に座っている内に、僧侶が小さな娘の為に食べ物を整える父親のように感じられ、温かいものが胸の中に満ちてきて、私はなんだかすっかり安心してしまった。

初めて食べるツァンパは見た目の通り、甘くないきな粉を捏ねたお団子の味そのものだ。お腹が空いていた私はそれなりに美味しく頂いたが、これを3度の食事として日常的に食すことを思うと、何とも味気ない気がした。下界の文化が流れ込み、町で暮らす人々の生活は様変わりしてきている事だろうが、本来厳しい自然環境の中で暮らしていたチベット族の人たちにとって、食事とは活動のエネルギーを得る為だけのもの、お祭りなどでご馳走を食べる日以外、日々の食の楽しみなどというものは、存在していなかったのではないだろうか。

簡単な昼食を終えた僧侶と私はソファーに並んで腰掛け、色々な話をした。僧侶の話は話題も多く会話も弾んで楽しかった。話している内に親しみの気持ちが増し、私が折り紙を取り出して花を折って見せると、喜んだ僧侶はそれを祭壇に備え、引き出しの中から紙に包んだペンダントヘッドのような物を大事そうに取り出すと、いくつかある中から一つを選び出し、お守りとしていつも身につけると良いと私に渡してくれた。それは薄い色のヒスイ(?)を削って作られた石のペンダントヘッドで、色々な形のものがあつたが、僧侶の言うことにはそれぞれ違った神様を表しているのだそう。

僧侶が私に選んでくれたのは、チベット語ではドルジャン、中国語では緑救度仏母と呼ばれる緑色の肌を持つ多羅菩薩を表すものだそうで、それは私がチベット仏教の神々の中で最も好きな神様だった。

このチベット高原を旅する間ずっと身近に感じられ、日増しに高まっていたチベットの神々への信仰心が、塔公を訪れて以来ますます強まっていた私に、この思い出深いラガン・ゴンパの僧より手ずから贈られた大好きな女神のお守りは、旅の記念としてもこの上なく、とても嬉しいものだった。

目を輝かせ、嬉しい、嬉しい!と素直に喜びを表す私に、僧侶は首からかけられるようにと赤い紐を取り出し、なにやらおまじないの言葉を唱えながらペンダントヘッドに通すと、輪にした紐を広げ私に頭を差し出すようにと告げた。僧侶と向かいあわせになった私、ありがたい贈り物を押し頂く気持ちで神妙に頭を



塔公寺のお坊さんにもらったペンダント

たれると、首に神様のペンダントをかけてくれていた僧侶の唇が、非常にさりげなく私のひたいに触れた。

は・・・!? こ、これは・・・?

それがあまりにさりげなく行われた為に、表面は平然と何も無かったかのように振る舞いながらも、内心では椅子から転げ落ちそうなほど驚愕していた私は、やはりそろそろおいとました方が良いでしょうと判断し、首にかけて貰ったお守りのペンダントに丁重にお礼の言葉を言いながら、もう帰りますというような言葉も重ねて素早く僧侶に告げた。私のいとまを告げる言葉に、まだいいのでは? もっとゆっくりしていけば・・・と、僧侶はちょっぴり残念そうな顔をしたものの、特に制することも無かった。

そうして、それまでと変わらぬ笑顔で私を部屋の戸口まで送ってくれた僧侶は、扉から出ようとする私を最後にちょと引き止めると、自分に向き合うように立たせて目を瞑る様に告げた。私はあまり目は閉じたくなかったが、これまで優しくしてくれた僧侶の言葉に何となく逆らえず薄く目を閉じると、僧侶は両手を私の肩に添えて今後の旅の無事と私の未来に多幸が訪れるようにといった祈りの言葉を唱えてくれたのだが、次の瞬間、僧侶の乾いた唇が再び私のひたいに触れ、更に一瞬、私の唇に触れた。

ぎょええええええ～～～!!!!

ほうほうのていで部屋を飛び出した私は手で口をこすりながら、逃げ出すように寺を足早に後にと、これまで神様の気配につつまれ、安らいでいたそれまでの信仰心を根底から覆されるような大惨事に動揺しながら、これでいいのか? チベット仏教は!?、と答えの返る事のない虚空にむかい、思わず何度も問いかけてしまう3日目の塔公の午後だった。(次号に続く)